四つのテスト　Ⅰ真実かどうか　Ⅱみんなに公平か　Ⅲ好意と友情を深めるか　Ⅳみんなのためになるかどうか

KADOMA ROTARY
Club Weekly Bulletin

門真ロータリークラブ

事務所　〒570-0038　守口市河原町 10-5　ホテル・アゴーラ大阪守口 5F
TEL　06-6993-0107　FAX　06-6993-0108　E-mail office-kadoma@silk.plala.or.jp
例会　毎週木曜日　12 時 30 分　　於　ホテル・アゴーラ大阪守口
会長　辻岡　昌美　幹事　玄野美紀子　会報広報委員長　橋田　真和　創立 1969 年 4 月 17 日

UNITE FOR GOOD

2025-26 年度 RI テーマ
「よいことのために　手を取りあおう」
RI 会長　フレンチェスコ・アレッツォ

Rotary
門真ロータリークラブ

2　OCTOBER　2025　No. 2566

２０２５年９月２５日 例会報告
第２５６５回 拡大例会

❑　ゲスト　大月光勲（こうくん）先生

❑　出席報告

会員数（出席免除会員２名含）	２１名
名誉会員	３名
本日の出席（出席免除会員含まず）	１０名
欠席	１１名
出席率	５２．６３％
8 月 28 日の出席(出席免除会員２名含)	１６名
メーキャップ後結果	１６名
出席率	８０．９５％

❑　台湾市南波ロータリークラブ様　来訪

❑　バナー交換

次回例会　１０月　９日（木）
卓話：「 電力の広域的な需要運用 」
下田 一彦　会員

❑　卓話　「 能面について」
大月光勲（こうくん）先生

【はじめに】
能面を作り始めてから、今年で 53 年になります。よく続いたものだと思いますが、能面作りはとにかく面白いのです。全部で 300 種以上ありますので、まだ作っていない面が沢山あります。そして、難しい。難しいからこそ、面白いのです。

能面は単なる仮面ではなく、演者の動きによって表情が変化する、非常に繊細な演出道具でもあります。

能楽師は演能曲が決まると、まず能面を選び、それから装束を決めると言われています。舞台に出る前、鏡の間で能面に一礼して顔にかけ、鏡を見つめながら能面と一体化します。しかし、時にその一体化が不十分なことがあります。それは観客にも伝わります。そして徐々に演者の感情が昂ってくると、能面が演者に憑依していきます。それを「顔に着く」と言い、まさに面が演者と一体化する感動的な瞬間です。

能面は、人間の顔の細かな部分を省略することにより、より複雑な表現が可能になるという、極めて日本的な美意識のもとに作られています。また、左右の表情を少し変えて、向かって右の眼を陰陽の「陰」にすることが多いです。能面は一見無表情ですが、演者が少し俯くと寂しげに、仰向けると明るく見えます。これは「テル・クモルの目」と呼ばれ、角度によって目が半眼になったり、晴眼になったりします。

口にも工夫があります。口角が少し開いているのは、能面にしか見られない特徴で、面打（めんうち）（能面制作者）の手柄とされています。これによって、話しているような、唄っているような、笑っているような、泣いているような表情が生まれます。このような多義的な表情を「中間表情」と呼びます。

世阿弥が能を高級な心理的芸術へと高めたことで、能面も心理を映す仮面へと進化しました。このような仮面は、世界に他に類を見ないものだと思います。

それでは、実物の能面をご覧いただきながら、その美意識と仕組みをご紹介いたします。

【能面の美意識と表情の仕組み】

※『小面（こおもて）』を手に持って

※『増女（ぞうおんな）』を手に持って

※『泥眼（でいがん）』を手に持って

※『白般若』を持って

※『笑尉（わらいじょう）』を手に持って

【創作面について】

室町時代の能面は、当然すべて創作面でした。それぞれの座が、自分の所有する優秀な能面を大切に守っていました。真似て作られたりすると、打ちこわしに殴り込んで死人が出たりしたそうです。それが徐々に緩やかになり名品を模して作るようになっていきます。

豊臣秀吉は能狂いで、能面を欲しがりましたが、さすがに太夫の能面を取り上げることはできず、面打に名品を写させました。そっくりに写した面打には「天下一」の称号が与えられました。こうして「写し」の時代が始まり、江戸時代には能が幕府の式楽となり、大名が能を習い始め、能面の需要が飛躍的に増えていきます。ほとんどが写し面となりましたが、それでも創作面は少しずつ作られ続けました。

室町初期に固有名詞の付いた能面は十数面でしたが、末期には 80 種類に、江戸末期には 300 種以上に増えています。

【新作能『長崎の郵便配達』】

昨年、能楽師・大倉正之助先生より、新作能のための面制作をご依頼いただきました。

作品名は『長崎の郵便配達』です。

この能の主人公、谷口稜曄（すみてる）さんは 16 歳時に郵便配達の途中で原爆にあいます。背中に大火傷を負い、1 年 9 カ月臥せったまま治療を受け、胸が床ずれであばら骨が見えるほどになります。4 年間入院して奇跡的に回復されました。取材に来て、その精神力に深く感動した英国の小説家ピーター・タウンゼンド氏との交流を描いたものです。タウンゼンド氏は、映画『ローマの休日』のモデルになった人物としても知られています。

私は、谷口さんの若い頃と中年期の面、そしてピーター・タウンゼンド氏の面を制作しました。実在の人物を能面にするのは初めての経験でしたが、写実に寄りすぎると生々しくなり能の世界にはそぐいません。そこで、特徴を抽出し、俗味をそぎ落とすことで、精神性を表現する面に仕上げました。

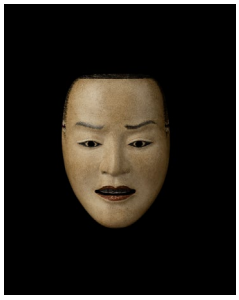
この作品は福岡・広島で上演され、谷口さんのご息女から「舞台に父が立っているようだった」とのお言葉をいただきました。

来月には、パリの日本文化会館での公演が予定されており、今度はピーター氏のご家族にご覧いただくことになります。残念ながら、今日これらの創作面を持参することは叶いませんでした。写真でご紹介させていただきますので、どうかご容赦ください。

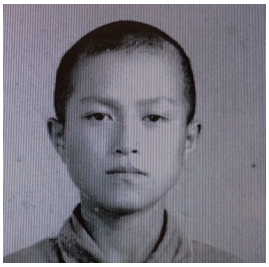
【おわりに】

能面は、言葉を超えて感情や物語を伝える力を持っています。

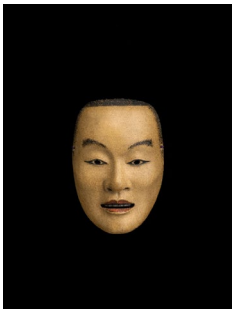
本日ご覧いただいた面が、少しでもその魅力を感じていただけるきっかけとなれば幸いです。



前シテ：郵便配達夫「稜曄」

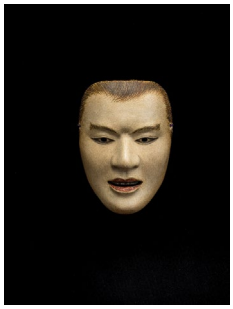


谷口稜曄氏の少年時代



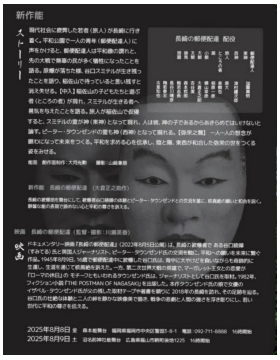
後シテ：和神（スミテル）

谷口稜曄氏の中年時代



後ツレ：洋神（ピーター）

ピーター・タウンゼンド氏



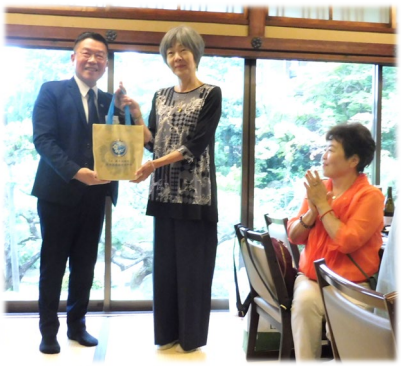
■■南波ＲＣご一行様来日■■

今年は、大阪関西万博開催に合わせて総勢１７名の方々がお見えになりました。
9/24 に関西国際空港へ到着され、辻岡会長、西川会員、藤田会員、濱中会員にお迎えに行って頂き、その晩は、グランドプリンスホテル大阪ベイの「彩（いろどり）」で歓迎会を致しました。
旅の疲れもなんのその、美味しい食事と再会で盛大な会となりました。

翌 25 日は、拡大例会を京都の「がんこ　高瀬川二条苑」で開催しました。例会の前に、清水寺の観光へご案内しました。

拡大例会では、会長のご挨拶、バナーとお土産の交換をし、ゲストスピーカーとして能面師　大月光勲先生をお招きし、能面についてお話を頂きました。
お話の内容はジュリアさんが同時通訳してくださり、みなさん興味津々でお話を聞いておられました。

中締めとして会長エレクトの下田さんに挨拶をいただき、無事終了しました。
例会後は、錦市場へご案内し、京都を満喫頂きました。
9/26 は、万博を堪能されました。辻岡会長、西川会員濱中会員も現地へ行かれ対応していただきました。
9/28 は、帰国前に関空アウトレットへ案内し、帰国の途につかれました。

５日間、送迎、会場準備などにご協力いただいたみなさま、本当にお疲れ様でした。

＊＊＊　例会スナップ　＊＊＊